ほうこん

題字・清水英夫

GALAC・12月号・付録
2008年12月6日発行（毎月1回6日発行）
昭和43年6月8日第三種郵便物許可
〒160-0022
東京都新宿区新宿5-10-14　中村ビル2F
NPO法人放送批評懇談会
TEL（03）5379-5521／FAX（03）5379-5510
ホームページ　http://www.houkon.jp/
Eメール　kondankai@houkon.jp
編集・隈部紀生

ギャラクシー賞上期の選考終わる
「GALAC」過去最高の部数発行
―10月理事会報告―

10月30日理事会を開催した。

◇出版編集事業委員会

「GALAC」1月号はギャラクシー賞上期の選考結果の特集、表紙は玉山鉄二、ニュースな人たちは、福地茂雄NHK会長。2月号はアナウンサー特集、表紙は広末涼子、ニュースな人たちは姜尚中東京大学情報学環教授。12月号は二宮和也の表紙で予約が殺到し、過去最高の1万2000部発行することになった。去年からの紙代の値上げで、これまでは印刷会社の企業努力でしのいでもらったが、今年も15%紙代が上がっているため、値上げを認めざるをえず、1月号から紙質を若干下げて支出増を極力抑えることにした。

◇選奨事業委員会

〈テレビ部門〉

10月29日に上期の選考委員会を開いた。応募は108本で上期としては多かった。応募作品、上期の月間賞作品から絞り込んだ21本から受賞作を決めたが、今回はレベルが高く、従来上期、下期とも7本ずつ選んでいた入賞作品を上期8本にできないかという意見も出た。これについて理事会でも検討した結果、これまでのルールを変えないほうがよいという意見が多く、従来どおり上期、下期とも7本にすることになった。

〈ラジオ部門〉

応募が29本、3割減でショックを受けている。減った理由はよく分からない。しかし入賞候補に選ばれた6本はこれまでに比べて遜色はない。

〈CM部門〉

応募は153本。13本の入賞候補を決めた。

〈報道活動部門〉

応募は15本でまずまず。入賞候補4本を選んだが、総じて水準は高かった。

◇企画事業委員会

来年2月18日のシンポジウム2009について講演や対論の出演者が一部決まった。残る出演者の詰めを急ぐ。

◇その他

厳しい経済情勢などから財務の強化を図るため財務プロジェクトを発足させて検討することになった。

［出席］音好宏、隈部紀生、上滝徹也、小田桐誠、藤田真文、五井千鶴子、坂本衛、嶋田親一、滝野俊一、丹羽美之、橋本隆、藤久ミネ、松尾羊一

お知らせ

ギャラクシー賞上期の入賞作品・入賞候補作品は11月18日（火）に放送批評懇談会ホームページhttp://www.houkon.jp/で発表されるほか、「GALAC 1月号」誌上に掲載されることになっています。

新入会員自己紹介

元祖テレビっ子。　酒井恵子

民間放送開局と同じ年に生まれた私は、生まれながらの〝テレビっ子〟。物心ついた頃から、テレビ無しには居られない体質（？）になっていました。中学生の時には、担任の教師に「テレビの虜になっているのは誰ですか」と、呆れられたほどです。

そんな私が、新聞社に入社して、最初に配属された部署がラジオ・テレビ報道室。全国のテレビ局から送られてくる番組表を元に、新聞のラ・テ欄を組み立てる仕事で、益々テレビにのめり込んで行きました。当時のあだ名は、ズバリ「ラ・テ子」。数年前に初めて上梓した本も『みんなテレビのおかげです』と、新聞社に勤務していながら、ニュースも、知識も全てテレビから教えてもらうテレビ漬けの日常を綴ったものです。

この度、歴史ある放送批評懇談会の正会員に迎えていただけることとなりました。「テレビ大好き人間」からのミーハー的発信に終始してしまうと思いますが、どうぞ宜しくお願い致します。

地域メディアの研究をしています　北郷裕美

学生時代にラジオ局のアルバイト（AD）に就いたことがきっかけでメディア周辺の仕事を続け、今は研究と言う形でメディアに向き合っています。東京に長く居りましたが、今世紀の初頭に地元に戻りまして、現在は地域メディアについての研究の傍ら、コミュニティ放送局でお話をしています。地元に戻って最初に感じたことは、東京にいるときに気がつかなかった情報の偏りです。東京では当たり前のことが、地方では役に立たない事がいかに多いか気がつきました。大きなメディアと小さなメディアが上手くバランスを取れる社会がいいな、と思って今は理論的なことも含めて考え続ける毎日です。

東京時代は、メディアの周辺でやんちゃな事ばかりしてきましたので、反省と共に今は見た目も含めて？更正（更生）したつもりです。少しでも社会に役立つメディアの研究と実践のために入会致しました。今後とも皆様のご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

会議記録

［10月］

2日　出版編集委員会
6日　企画事業委員会・シンポジウムプロジェクト
18日　選奨・報道活動選考会
20日　選奨・ラジオ定例部会
21日　選奨・ラジオ「ワイド＆エンタテインメント」選考会
23日　出版編集委員会
24日　選奨・テレビ月評会
27日　選奨・ラジオ「ドラマ＆ドキュメンタリー」選考会
28日　選奨・CM選考会
29日　選奨・テレビ選考会
30日　理事会

ギャラクシー賞 マイベストTV賞 2008年10月度投票開始！

ギャラクシー賞マイベストTV賞2008年10月度作品の投票を開始します。正会員の皆さまは、添付した〈正会員専用　投票用紙〉でマイベストTV賞の投票にご参加ください。

リスト以外の作品を記入できる欄を設けました。ご活用ください。

ウェブまたは携帯サイトから参加の場合は、投票ページに入室ください。

日韓中テレビ制作者フォーラム・イン・福岡
3国の番組レベルそろう
共同制作の基盤固まる

隈部紀生

今年で8回目を迎えた日韓中テレビ制作者フォーラムが9月24日から27日まで福岡市のアクロス福岡で開かれた。日韓中3国から150人が参加して番組コンクールで競うとともに、若者とテレビや番組の共同制作について熱心な議論が繰り広げられた。

24日の開会式でフォーラムの鄭秀雄常任組織委員長は「優れたコンテンツを開発して韓流、日流、華流で欧米に負けないように発展させたい」と開会を宣言した。また鄭さんとともにフォーラム生みの親の一人である志賀信夫当会名誉会長は「グローバル時代に北東アジア3国が地域の力を発揮し始めた。ご近所の底力を見せる大会にしてほしい」と挨拶した。

続いて各国のテレビ事情が報告され、日本からは当会理事長の音好宏上智大学教授が「インターネットの発展と経済情勢で日本でもテレビの広告は厳しいが、今後は知的財産のルール整備、人材育成によるクリエイティビティ向上、テレビ番組を外から批評してテレビをたたき直すことの3点が重要である」と講演した。

番組コンクールで今回は各国3本ずつの一般番組と若者をテーマにした番組1本ずつが映写され、参加者全員で視聴して、制作者と質疑を交わした。従来の大会では参加番組全部に賞を贈る友好本位の運営だったが、今年からはコンクール性が強められ、参加者全員が投票をして上位6位までに入った番組について各国の審査員が審査をして各賞を決めた。その結果グランプリには鹿児島の南日本放送（MBC）の「やねだん」が選ばれた。過疎地区の住民総参加の町おこしを温かい目で見つめたこの番組は、先のギャラクシー賞選奨に続く受賞で、大会後早稲田ジャーナリズム大賞も受賞した。制作担当者は「地域のテレビ局は厳しい状況で番組だけのための取材はできない。毎日の取材を積み重ねていいものをつくることが生き残りの道で、地域ジャーナリズムの願いを込めた」と話していた。最優秀賞には韓国の独立プロデューサー李承俊さんが制作した「神の子供たち」と中国CCTVの「森林の歌～大砂漠のコヨウ」が選ばれた。

講演する音好宏当会理事長

今回の大会のテーマ「東アジアの若者たちは今」について3国が持ち寄ったドラマでは日本のフジテレビは「ラスト・フレンド」で若い社会人のデート・バイオレンスを描いた。韓国KBSの「ジャングル・フィッシュ」は受験戦争の激しい高校での試験問題漏洩を取り上げ、中国の北京テレビ芸術センターの「奮闘」は、大学を卒業できない学生の自殺を扱っていた。各国とも若者が抱える深刻な問題とインターネット、ケータイが氾濫する中での再生への模索が焦点だった。またシンポジウムでは各国の若者とテレビ、インターネットの関係が報告され、中国の制作者たちは「80年代以降に生まれた一人っ子は親に溺愛されて他人とのコミュニケーションが苦手で、ネットはそういう若者が発言するいいツールになった。大学生はテレビを見ず、ネットで1日にテレビドラマ十数本を飛ばしながら見ている。しかし農村部ではネットを利用できない若者も多く、テレビが重要だ」と話した。日本の制作者らは「若者がネットやケータイに興味が行ってしまって、テレビ離れが進んでいるのをどうやって引き付けていくかが課題だ」「コミュニケーションの手段は変わっても、お互いにかかわりあっていくことは変わらない。テレビにはかかわりあいを探っていく役割がある」と語った。

シンポジウム「東アジアの若者たちは、今」

大会の一貫した目標である3国の共同制作について、シンポジウムでは3国の地域の放送局が共通のテーマで番組を制作して各国ごとに編集して放送している様子が紹介され、「3国のプロデューサーは3国の青少年たちが生活環境は違っても、葛藤や悩みの中から未来を夢見ていることを感じている」と報告された。これまで数多くの共同制作をしてきた鄭秀雄常任組織委員長は「お互いの番組を見て質を高め、交流を深めることが重要だ。共同制作に難問はあってもいつか解決できる」と締めくくった。

今回の大会では全体として3国の番組の質が同じレベルになって、参加した制作者たちがお互いにほかの国の番組から学びあおうという姿勢が強まったと感じられた。ただ日本の若い制作者の参加が少なく、各国から参加番組の制作者以外の現場のプロデューサーやディレクターが気軽に参加できるように工夫する必要があるようだ。

「神の子供たち」で受章の韓国独立プロデューサー李承俊さん

「やねだん」で受章のMBC山縣由美子さん

フォーラムの参加者は150人

「森林の歌」で受章の中国CCTV羅琴さん

また今回のようにテーマを決めて番組を持ち寄るのは、議論の焦点を絞り、各国ごとの共通点と違いをはっきりさせて共同制作の前進を図る上で有効な基盤をつくるのに役立ったと思われる。共同制作にはまだ問題もあるのは確かだが、日本と韓国、日本と中国の間では、歴史認識や教科書という困難な問題についても共同で地道な努力が続けられていることでもあり、3国のテレビ界としても共同制作について次のステップを踏み出す時期にきていると思う。2009年の大会は韓国の忠清南道で開かれる。